

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月18日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520281

研究課題名（和文） 19世紀後半から20世紀初めのロシアにおける身体と表象の関係の構造転換

研究課題名（英文） The structural transformation of the body and representation in late nineteenth- and early twentieth-century Russia

研究代表者

番場 俊（BAMBA SATOSHI）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：90303099

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下のようにまとめられる。(1)同時代の法的・宗教的言説を背景にドストエフスキーのテキストを分析することで、文学的言語行為としての「告白」の不安定さを浮き彫りにした。(2)19世紀に引き起こされた視覚の再構成が文学に与えたインパクトを考察した。(3)精神分析と小説の関係の理論的再検討を通して、ドストエフスキーの小説における「突然」と「あとから」の時間構造の重要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The results of my research can be summarized as follows: 1) By reading Dostoevsky's texts against the background of contemporary jurisprudential and ecclesiastical discourses, I drew attention to the precarious status of "confession" as a literary speech act. (2) I analyzed some aspects of the reconstruction of the vision in the nineteenth century and its impact to literature. (3) Through theoretical reconsideration of the relationship between psychoanalysis and novel, I pointed out the singular structure of temporality "suddenly-afterwards" in Dostoevsky's novels.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ロシア東欧文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、(1)「告白(自白、痛悔)confession, исповедь」という制度を、文学、宗教、司法、精神分析等の複数領域にまたがる制度の問題と捉えたフォーコーやピーター・ブルックスの研究（『性の歴史』、『告白の困難』など）、(2)身体とテクノロジーの歴史的相関に注目するキットラーやクレリーの研究（『書き込みのシステム 1800/1900』、『観察者の系譜』

など）、(3)ドゥルーズの身体—機械論をゴッリやドストエフスキーの作品に適用して興味深い指摘をしたヤンポリスキーやポドロガらの研究（『デーモンと迷宮』、『皮膚なき人間』など）に示唆をうけつつ、本研究代表者がこれまで科学研究費の補助を受けておこなってきた研究（平成17～19年度若手研究(B)「ロシア文化史のコンテクストにおけるミハイル・バフチンの記号概念の再検討」）

を発展させるかたちで構想されたものである。また、本研究の開始から一年遅れて研究分担者として参加することになったグループによる研究（平成 21～23 年度基盤研究(B)「声とモデルニテに関する比較総合的研究」、代表・高木裕）は「声」の問題に特化したものであったため、本研究と「声とモデルニテ」のグループ研究を有機的に組み合わせることによって、相乗的な効果が得られることも期待できた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19 世紀後半から 20 世紀初めのロシアにおけるいくつかの文化的・社会的実践をとりあげ、芸術、法、心理学の境界領域に学際的なアプローチを試みることで、身体と表象の関係のあり方が世紀転換期を境に大きく変化したことを検証することにある。

主要な課題は以下の通りである。

- (1) 19 世紀後半における「告白(自白、痛悔)」の文化的・法的・宗教的地位の変化を明らかにすること。
- (2) 身体をめぐる諸科学(心理学・生理学・反射学ほか)が、ドストエフスキーをはじめとする 19 世紀文学や、マレーヴィチをはじめとする 20 世紀芸術とのあいだで結んだ関係を検討すること。
- (3) 身体と表象の関係に関する理論的再検討をおこなうこと。

3. 研究の方法

- (1) 「告白」の言語行為に関しては、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』(1879-1880 年)を中心にとりあげ、この作品において様々な形で反復される「告白」を、同時代の複数の言説制度(宗教、法、文学)との関係において検討するとともに、このような「告白」の分散が、ドストエフスキーにおける「小説」ジャンルの考古学的反省に対して持っていた積極的な意義について考察する。方法論的な導きとなるのは、先にあげたフーコー、ブルックスの著作のほか、J・L・オースティンの言語行為論、グレゴリー・ペイトソンのコミュニケーション理論である。
- (2) 身体をめぐる諸科学と文学・芸術の関係に関しては、『作家の日記』(1873, 1876-1881 年)をはじめとするドストエフスキーのテキストに現れる、女性の「アフエクト(激情)」という主題や、「写真」というテクノロジーのインパクトに関する作家の言及をとりあげるとともに、画家マレーヴィチの理論的テキスト、心理学者ヴィゴツキーのテキスト、コーニャシュテルンをはじめとする法学者たちのテキストを検討する。理論的には、前述のフーコー、クレーリーのほかに、ロシア・アヴァンギャルドの芸術実践における生

理的基盤を指摘したグリガルの著作などを参照している。

(3) 理論的研究においては、フロイトの精神分析における「事後性 Nachträglichkeit」やデリダの脱構築における「差延 différance」の概念、さらにはパフチンの小説論や木村敏の時間論(イントラ・フェストゥム論)について、あくまでドストエフスキーの小説テキストに即しながら再検討する。

4. 研究成果

本研究は、当初、19 世紀後半から 20 世紀初めのロシアにおける芸術的・思想的実践を幅広くとりあげて身体と表象の関係を明らかにする予定であったが、結果的には、20 世紀初めの身体と表象の関係の転換を準備した 19 世紀後半の諸現象の解明に努力を集中することになった。

(1) 文学と法と宗教が交錯する領域としての「告白」については、ドストエフスキーのいくつかのテキストを集中的に検討することによって、19 世紀において「告白」という文学的言語行為が置かれていた不安定な位置を明らかにすることができた。

19 世紀後半における文学的告白の前史として、ドストエフスキーの『白夜』(1848 年)に注目することによって、その演劇的な側面(主人公の夢想家はヒロインとの関係において、ロッシーニのオペラ『セビリヤの理髪師』におけるフィガロとロジーナの関係を再演する)を明らかにすることができた。この作品における主人公の告白や、半ば読まれ/半ば隠されたまま二人の運命を左右する手紙といった主題は、ドストエフスキーの創作活動におけるこのテキストの境界的な位置を示すものである。

『地下室の手記』(1864 年)から『罪と罰』(1866 年)にいたるドストエフスキーの「告白小説」のプランの変更をたどることによって、ドストエフスキーにおける「告白の失敗」という視点を取り出すことができた。フロイトやシュЕСТフ以来、ドストエフスキーの作品を作家自身の「告白」とみなす伝統が存在しているが、彼の作品においては、「告白」の内容というよりは、むしろ「告白」という言語行為そのものの根拠が、問われるべき問題(パフチンのいう「芸術的思考の対象」として浮上していると考えなければならぬ)。

「告白」の言語行為を社会的・歴史的な文脈に置きなおして再考するとき、従来「予審判事」という訳語が当てられてきた『罪と罰』(1866 年)の副次的人物ポルフィーリー・ペトローヴィチの官職の重要性が浮かび上がってくる。пристав следственных дел(捜査担当官)は 1838 年 4 月 1 日のサンクトペテル

ブルク市警察特別設置法で設置された官職であって、1860年および1864年の司法制度改革で導入された *судебный следователь* (予審判事)とは異なっており、『罪と罰』の舞台となった1865年当時の首都サンクト・ペテルブルクには「予審判事」の官職が置かれていなかったことが、I・V・ゲッセンの『司法改革』(1905年)に引用された1892年のM・F・グロムニツキーの回想、A・F・コーニの著作(「検察官の手法と課題」1911年、「予審判事」1910年)さらには、1865年、68年の『サンクト・ペテルブルク県年鑑』から確認できる。新しい裁判制度の必要性が熱心に語られつつも、いまだ旧刑事訴訟法の形式主義の束縛のもとにあった過渡期において、形式主義を侵犯して被疑者の内面の告白を引き出そうとしていた捜査担当官ポルフィーリー・ペトローヴィチは、ドストエフスキーによって過剰なまでの歴史的実在性を与えられた人物だったのである。さらに、取調官の仕事を「一種の芸術」と称し、心理学と真理の関係についてアイロニカルに言及するポルフィーリーの姿勢からは、小説というジャンルそのものを問題化し、安易な心理主義を乗り越えようとしていたドストエフスキーのメタ・フィクショナルな問題意識を読みとることができる。

(2) 身体をめぐる諸科学(心理学・生理学・反射学ほか)と芸術の関係については以下の通り。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』、『作家の日記』をとりあげ、とりわけ『作家の日記』1876年10月~12月号に集中的に現れる女性の身体というテーマ(継子殺害未遂事件の容疑者コルニーロヴァの「アフェクト」にとりつかれた身体、ゲルツェンの娘およびモスクワのお針子ポリソヴァの自殺者の身体、短編小説「おとなしい女」で自殺するヒロインの身体)に注目して、女性の身体が文学的・医学的・法的言説が交差する争点となっていたことを考察した。19世紀後半のロシアにおける「嬰兒殺し」をめぐる法医学的言説を検討したローラ・エンゲルスタインによれば、当時、「自分では抑えきれない力に「いやいやながら、受動的に」反応する女性は、自らの行為の責任ある主体ではありえないとみなされていた。「妊娠中の一時的アフェクト」を強硬に主張してコルニーロヴァ裁判に介入したドストエフスキーは、少なくともこの点では、時代の支配的イデオロギーに忠実に従っていたと言えるのである。

ドストエフスキー自身の肖像写真をめぐるアンナ夫人や同時代人の証言から出発して、ドストエフスキーの小説や評論における写真/絵画への言及について検討することで、「肖像」という主題を通して、19世紀の

ドストエフスキーと、マレーヴィチをはじめとする20世紀初めのロシア・アヴァンギャルドとのあいだの距離を測定することを試みた。マレーヴィチはルネサンス以降の絵画の発展を、背景の壁の前面への接近による奥行きが無効化の歴史として説明していたが(彼の学生であった画家ステルリゴフの回想による)、ドストエフスキー的な書割に対するナボコフの嫌悪(『ロシア文学講義』)からもうかがえるように、ドストエフスキーの小説の独特な空間には、ある種の窮屈さを感じさせるところがある。また、ドストエフスキーの小説についてしばしば指摘される特異な時間感覚(「突然」の頻出、瞬間の永遠化、外傷的な出来事に対する事後的な回想など)は、これまで「写真」について語られてきた時間感覚(ロラン・バルト、ベンヤミン)におどろくほど接近している。この意味で、19世紀後半のドストエフスキーにみられる身体とテクノロジーの関係は、20世紀初頭のアヴァンギャルドにおいて繰り返し問題化された身体と機械の関係をはるか昔に準備していたように思われる。

このほか、法の領域への生理学的・心理学的言説の侵入を考察するために、20世紀初めにロシアで反響をよんだ心理学者シュテルンの証言の心理学を検討したが、この主題に関しては十分に展開することができなかった。

(3) 理論的考察としては、フロイトによるドストエフスキーの精神分析的解釈(「ドストエフスキーと父親殺し」1928年)を再検討し、伝記的事実に関する近年の研究成果をもとにフロイトの事実認識の誤りを再確認するとともに、精神分析と小説の関係を、オイディプス・コンプレックスの内容面ではなく、主体による時間性の経験という形式面において再考することを試みた。

第一に、フロイトにおける「外傷」と「事後性」の概念(そのもっとも典型的な現われが、いわゆる「狼男」の症例)が、ドストエフスキーの小説に頻出する「突然」(これについてはモスクワ・タルトゥ学派のトポロフの有名な論文がある)と「あとから」(こちらは従来あまり注目されてこなかった)のリズムによって構造化される時間性と類比的であることが指摘できる。

さらに、「差延」の概念に立脚したデリダの脱構築、「現在」あるいは「カーニヴァル化された時間」に立脚したバフチンの小説論、現象学的・病理学的経験から導き出された木村敏の時間論(とりわけその「イントラ・フェストゥム」論)などの理論的著作を、ドストエフスキーの小説(『カラマーゾフの兄弟』に加えて、『永遠の夫』1870年、『悪霊』1871-72年など)とつきあわせて検討した。

パフチンや木村敏のいう「現在」は、脱構築からの批判を招きかねない面をもっているが、他方でドストエフスキー的な「現在」は、精神分析において主体の「現在」を押し潰してしまう「反復強迫」から時間を解放し、「未来」の偶然性を肯定する可能性をそなえている。パフチンの時間論を批判的に発展させたジャック・カトーは、ドストエフスキーにおけるこうした時間を、「力 puissance, мощь の時間」と呼んだ(『ドストエフスキーにおける文学創造』)。それは、「状況の爆発的な急変のなかで、過去と未来が格闘し、主人公に至高の自由の可能性が開示される瞬間」であり、ドストエフスキーの小説が、なによりもまず「自由」や「偶然性」をめぐる「問い」として提起されていたことを強く示唆するものである。

なし

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

番場俊「『罪と罰』の捜査担当官ポルフィリー・ペトローヴィチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察」、『現代思想』、査読無、第38巻第4号、2010年、286-297頁

番場俊「写真からドストエフスキーへ」、『ecce 映像と批評』第1号、査読無、2009年、106-119頁

[図書](計2件)

編者 栗原隆 著者 栗原隆、佐藤透、鈴木光太郎、城戸淳、番場俊(他9名)
『共感と感応 人間学の新たな地平』東北大学出版会、2011年、全381頁
このうち、「文学と手紙、感応の遊戯」(135-157頁)を番場俊が単独で執筆

編者 栗原隆 著者 栗原隆、城戸淳、鈴木光太郎、鈴木正美、番場俊(他11名)
『人文学の生まれるところ』東北大学出版会、2009年、全359頁
このうち「表象文化論 イメージ/テキスト/身体 of 夢」(91-108頁)を番場俊が単独で執筆

6. 研究組織

(1)研究代表者

番場 俊 (BAMBA SATOSHI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：90303099

(2)研究分担者